

佛教文化学会紀要  
平成十九年二月十五日

第十五号 抜刷

『觀經』 「是心作佛是心是佛」釈をめぐって

——『往生論註』を中心に——

大正大学綜合佛敎研究所研究生 吉水岳彦

# 『觀經』「是心作佛是心是佛」釈をめぐって

## ——『往生論註』を中心に——

吉 水 岳 彦

### 一、はじめに

『觀經』「是心作佛是心是佛」釈は中国で浄土教にかかわった多くの僧達によって行われている。唐代中期までも、曇鸞『往生論註』<sup>1</sup>、慧遠『觀無量壽經義疏』<sup>2</sup>、吉藏『觀無量壽經義疏』<sup>3</sup>、道信『入道安心要方便法門』(『楞伽師資記』道信条所収)<sup>4</sup>、龍興『觀無量壽經記』<sup>5</sup>、善導『觀無量壽仏經疏』(以下善導『觀經疏』と略す)<sup>6</sup>、伝智顛撰『觀無量壽仏經疏』<sup>7</sup>、懷感『釈浄土群疑論』<sup>8</sup>、李通玄『新華嚴經論』<sup>9</sup>、飛錫『念佛三昧宝王論』<sup>10</sup>等、数多くの解釈がある。このように見ていくと、今回取り扱う『往生論註』以外はすべて隋代以降のものとなるため、『往生論註』が現存最古のものであり、嚆矢といえるだろう。ここでまず『往生論註』における『觀經』「是心作佛是心是佛」釈を考察する前に、簡単ではあるが『觀經』「是心作佛是心是佛」釈が持つ問題点について触れておきたい。『觀經』において「是心作佛是心是佛」の文が説かれるのは第八像想観であり、

諸佛如來<sup>11</sup>是法界身<sup>12</sup>。入<sup>13</sup>一切衆生<sup>14</sup>心想<sup>15</sup>中<sup>16</sup>。是<sup>17</sup>故汝等心<sup>18</sup>想<sup>19</sup>佛<sup>20</sup>時<sup>21</sup>。是<sup>22</sup>心即是<sup>23</sup>三十二相八十隨形好<sup>24</sup>。是<sup>25</sup>心作佛是心是佛。諸佛正徧知海<sup>26</sup>從<sup>27</sup>心想<sup>28</sup>生<sup>29</sup>。

というものである。この中「是心作佛是心是佛」の文は「修行により」この心は(清浄化されて)仏となるのであり、この心こそ(本来清浄であつて)仏なのである」と解釈して、「この心仏となる、この心仏なり」と読むこと

も、「この心に仏(の相好)を作(想す)るのであり、(仏が現じている)この心こそが仏である」と解釈して、「この心仏をつくる、この心仏なり」と読むことも、可能である。そして、「是心作佛是心是佛」をいかに解釈するかによつて、自己の心中に仏があるのか、それとも自己の心外に仏があるのか、というように仏と衆生の關係がまったく異なったものとなるのである。またそれに付随して、『觀經』に説くところの阿弥陀仏及び浄土が「有相」であるか「無相」であるかの問題、及び「正徧知」を単に如来の十号と捉えるのか、仏の悟りの内容と捉えるのか等の問題も生じてくる。つまり、この『觀經』「是心作佛是心是佛」の解釈をめぐっては、いかなる仏を求めべきであるのか、またその仏と自己とはいかなる關係にあるのか、という極めて重要な問題が生起してくるのである。

本論文はそういった問題点を踏まえて、『往生論註』における『觀經』「是心作佛是心是佛」釈について、①「法界身」という仏身がいかなるものなのか、②「是心作佛是心是佛」という状態がいかなる状況なのか、③「諸佛正徧知海」という時の仏とはいかなる存在であるのか、という三点を中心に考察を行うものである。また、『往生論註』には「相好の光一尋にして色像羣生に超えたり」という偈頌によつて仏の身業莊嚴功德が詠われている。曇鸞大師(以下尊称を略す)は『往生論』の注釈書である『往生論註』において、『觀經』第九真身觀の「阿弥陀如来の身は高さ六十万億那由他恒河沙由旬なり。仏の円光は百億三千大千世界の如し」という文を用いて、偈頌中の「相好の光」を説明する。このように身業莊嚴功德の偈頌が『觀經』真身觀引用で説明し尽くされているにもかかわらず、何故かその後更に阿弥陀仏の仏身に関する問題を孕む『觀經』第八像想観「是心作佛是心是佛」の文について問答を設け解釈を加えている。本論文では、曇鸞がここで「是心作佛是心是佛」釈を行った意義についても探っていきたい。この問答は『往生論註』上巻で仏八種莊嚴功德を説く中における唯一の問答であり、曇鸞は仏身の身業功德を説き示す箇所に設けている。『往生論』が偈頌とその解説である長行によつて構成されていることと同様に、注釈書である『往生論註』も上巻と下巻の内容が対応するようにできている。曇鸞が『觀經』「是心作佛是心是佛」釈を行った意義を考察するにあたっては、そうした『往生論註』の構成を踏まえて、釈が行われている上巻莊嚴身

業功德成就の対応箇所である下巻所説の仏三業莊嚴功德積と合わせ考え、述べていきたい。そして最後には、「是心作佛是心是佛」釈自体とその意義を考察することを通じて導き出された曇鸞における阿彌陀仏觀、及び仏と衆生の關係が、後代の浄土教者である道綽・善導大師（以下尊称を略す）においていかに受容されているかについても言及していきたいと考えている。

## 二、『往生論註』における「是心作佛是心是佛」釈

『往生論註』における『觀經』「是心作佛是心是佛」釈は次の通りである。

問曰觀無量壽經言、諸佛如來是法界身、入一切衆生心想中、是故汝等心想佛時、心即是三十二相八十隨形好、是心作佛、是心是佛、諸佛正徧知海、從心想生、是義云何、答曰身名集成界名、事別、如眼界緣根、色、空、明、作意、五、因緣生、名爲眼界、是眼、但自行已緣、不行他緣、以事別故、耳鼻等界亦如是、言諸佛如來是法界身、者法界是衆生心法也、以心能生世間出世間、一切諸法、故名心爲法界、法界能生諸如來、相好身亦如色等、能生眼識、是故佛身名法界身、是身不行他緣、是故入一切衆生心想中、心想佛時、心即是三十二相八十隨形好、者當衆生心想佛時、佛身相好顯現衆生心中也、譬如水清則色像現、水之與像不一不異、故言佛相好身即是心想也、是心作佛、者言心能作佛也、是心是佛、者心外無佛也、譬如火從木出、火不得離木也、以不離木故、則能燒木、木爲火、燒木即爲火也、諸佛正徧知海、從心想生、者正徧知者眞正、如法界而知也、法界無相、故諸佛無知也、以無知故、無不知也、無知而知者、是正徧知也、是知深廣、不可測量、故譬海也。

前述の通り、ここでは①「法界身」②「是心作佛是心是佛」③「諸佛正徧知海」の三点を中心に考察し、『往生論

註』における『觀經』「是心作佛是心是佛」釈の特色を見ていきたい。

### ①「法界身」について

まず、曇鸞は「法界身」の「身」を諸要素が集まり合成したものとし、「界」を事物が差別されて混同しないこととして、「法界」が十八界内の一つであり、「身」は因縁生起によつて成じたものと解釈している。そして、十八界の在りようと因縁生起について、眼界縁を例えとしながら丁寧に説明を行っている。それは、眼界縁が眼根（眼の感覚が生ずるためのよりどころ）と色（眼で見られる対象）と空（空間）と明（明かり）と作意（対象に注意を向けること）という五つの因縁によつて生じており、これを眼界（眼の領域）と名づけるというのである。この眼根がただ自己に必要な縁（眼の五因縁の内、眼根を除いた四因縁）にのみはたらきかけて、眼根と対象が異なる他縁（眼根以外の他根の所縁）にはたらきかけないように、「法界」の対象は意根（心）であり、それ以外のものと關係することはないことを説明している。曇鸞はそうした前提に基づいて「諸仏如來是法界身とは、法界はこれ衆生の心法なり。心よく世間出世間の一切の諸法を生ずるをもつての故に、心を名づけて法界となす。法界よく諸仏如來の相好身を生ずること、また色等のよく眼識を生ずるがごとし。この故に仏身を法界身と名づく」と説き、衆生の心法（法界）は世間（世俗）・出世間（世俗を離れた仏の境界）のあらゆる事象を生起するものであり、眼界において「色」等の因縁が集まって眼識を生起するように、諸々の如來の相好身を生起するとしている。そして、この「法界身」はただ衆生心とのみ対応するから、『觀經』に「一切衆生の心想の中に入りたまう」と説かれると解釈している。また、この時の「法界身」と衆生心の關係について「心想仏時、心即是三十二相八十隨形好とは、衆生心に仏を想う時にあつて、仏身相好、衆生の心中に顯現するなり。たとえば水清きときは則ち色像現じて水と像と一ならず異なるがごとし。故に仏の相好身即ちこれ心想事成なり」と言う」と述べ、色像を映しだす水のように、仏の相好身は衆生の心が映し出したものであり、水と水に映る色像の關係と同様に、衆生の心とそこに映る仏

の相好身を「不一不異」の關係としてゐる。曇鸞はこのように衆生心（法界）において因縁生起する相好の身を「法界身」と捉えている。そしてこの法界身（三十二相八十隨形好を有する相好身）とは、仏を想う衆生の心中に顕現する仏身であることを示している。

### ② 「是心作佛是心是佛」について

上述の通り、曇鸞は「法界身」を仏の相好身と解釈し、その仏の相好を心に想うことによってその姿を心中に現じさせるとしている。そのように仏の相好身が衆生心中に現れている状況を曇鸞は「是心作佛」とは、言うところは心よく仏を作るなり。是心是佛とは、心の外に仏無し。たとえば火は木より出でて火は木を離れることを得ず、木を離れざるをもつての故に則ちよく木を焼く。木、火の焼によつて、木即ち火となるがごとし」と譬えをもつて説明する。すなわち「是心作佛」とはこの心が仏を作することを指し、「是心是佛」とはこの心の外に仏はないことを意味すると説くのである。また、木（衆生の心）と火（仏の相好身）の両者が元から同一のものであるのではなく、衆生心という木は仏の相好身という火によつて焼かれた（浄化された）時に仏となるとしていることが確認できる。衆生は心外の仏の相好身を自らの心中に想うことによつて、心外の仏を心中に現起させるのであり、その仏が現れている時が仏であるとしている。つまり、仏という火があるからこそ衆生心という木は焼かれて仏の火となるのである。いいかえれば、「浄化作用のある仏」が「衆生の心」において顕現している状態が「是心作佛」である、としているのである。このように曇鸞は喩えをもつて仏と衆生の關係が二元的であつて離れず、「衆生の心」が仏の相好身を「作想」することによつて「仏」たりえることを示している。

### ③ 「諸佛正徧知海」について

「正徧知」とは「正等覺」と同義であり、あまねく正しく悟つた者という意味である。如来の十号の一つとして用いられる場合が多いが、曇鸞はここで衆生の心想より生ずるとされる諸佛正徧知を仏の完全な智慧・悟りとして捉えている。つまり、衆生の心想に顕現する諸佛が得ている「正徧知」というほどの意味に解釈しているのである。それは「諸佛正徧知海從心想生」とは、正徧知とは真正に法界にかなうて知るなり。法界無相なるが故に諸佛は無知なり。無知をもつての故に知らざるといふことなし。無知にして知るはこれ正徧知なり。この知は深広にして測量すべからず。故に海にたとふなり」とあることから理解できる。ここで曇鸞は、「正徧知」とは正しく法界に相應して知ることであると釈している。この法界は、仏が眞実清淨である為の依りどころとなる法そのものを指し、この法界をさとした諸佛は無知であつて一切を知る故に「正徧知」であるとしている。このような「正徧知」の解釈は、曇鸞が前述の仏の相好身を仏智の境界に基づくものとし、執着を有する「事相」ではなく、出世間に入った上であらわされる「有相の仏身」としていたことを示すものであることがうかがえる。

以上のように、『往生論註』における「法界身」は有相の仏身と解釈されるのであり、衆生心中にその相好身は現じるとしてゐる。それは衆生が心外の仏の相好身を心に想うことによつてその姿を心中に現じさせることであり（是心作佛）、仏の相好身が衆生心中に現れている状況（是心是佛）をいうのである。そして、心想中に顕現する仏身は相好を持つといえども、仏智（正徧知）を得ており、衆生の心想はこの仏の相好身を映し出した時に浄化されるのであり、この時の心が仏たり得るとするのである。曇鸞は『觀經』「是心作佛是心是佛」釈を通じて、仏と衆生の關係が二元的であつて離れず、尚かつ衆生の心中に現れる仏は相好を有しながらも仏智の境界（法界・法相にかなつた智慧）にあることを説き示しているのである。

## 三、『往生論註』における『觀經』「是心作佛是心是佛」釈の意義

曇鸞は『觀經』「是心作佛是心是佛」釈において、仏智の境界における仏の相好を肯定的に解釈している。ここでは更に論を進めて、このような「是心作佛是心是佛」釈が何故に身業功德成就において説かれなければならないかについて、身業功德成就の偈頌に対応する長行解釈を中心に考察を加えたい。

『往生論註』における仏三業莊嚴功德の内容は以下の通りである。

何者莊嚴身業功德成就、偈言「相好光一尋色像超群生、故、若欲觀佛身、當依觀無量壽經」、何者莊嚴口業功德成就、偈言「如來微妙聲梵響聞十方、故、何者莊嚴心業功德成就、偈言「同地水火風虛空無分別、故、無分別者無分別心、故、凡夫衆生、以身口意、三業造罪、輪轉三界、無有窮已」、是、故、諸佛菩薩莊嚴身口意、三業、用治衆生、虛誑、三業也、云何用治衆生、以、身見、故、受三塗、身卑賤、身醜陋、身八難、身流轉、身、如是、等、衆生見、阿彌陀如來、相好光明、身者如上、種種、身業、繫縛皆得解脫、入如來家、畢竟得平等、身業、衆生以、憍慢、故、誹謗、正法、毀、皆、聖賢、相、痺、尊長、如是、之人、應受、拔舌、苦瘡、苦言教不行、苦無名聞、苦、如是、等、種種、諸苦、衆生聞、阿彌陀如來、至德、名號、說法、音聲、如上、種種、口業、繫縛皆得解脫、入如來家、畢竟得平等、口業、衆生以、邪見、故、心生分別、若、有若、無若、非若、是若、好若、醜若、善若、惡若、彼若、此有、如是、等、種種、分別、以、分別、故、長、淪、三有、受、種種、分別、苦、取捨、苦、長、寢、大夜、無、有、出、期、是、衆生若、遇、阿彌陀如來、平等、光照、若聞、阿彌陀如來、平等、意業、是等、衆生如上、種種、意業、繫縛皆得解脫、入如來家、畢竟得平等、意業」

下巻の身業莊嚴功德を説くところには、はじめに「もし仏身を觀せんと欲せば、まさに觀無量壽經に依るべし」とあり、仏身を觀ずる時には上巻で問答として取りあげられた「是心作佛是心是佛」釈を含む『觀經』に依るべきことが明示されている。この言葉は仏の身業莊嚴功德に限って補足されたものであるが、この後の細かな解釈につい

ては身業だけに限って説明されることはなく、仏の三業莊嚴功德をまとめて解説している。諸仏の三業功德については「凡夫衆生は身口意の三業に罪を造るをもつて三界に輪轉して、窮まり已むことあることなし。この故に諸仏菩薩は身口意の三業を莊嚴して用いて衆生の虚誑の三業を治したまうなり」といつている。凡夫衆生が罪を重ねて三界を出ることができないため、諸仏菩薩は身口意の三業を莊嚴して、その莊嚴した身口意三業をもつて衆生の虚誑の三業を対治するとしていた。つまり曇鸞が、仏は罪を重ねて三界を出ることがない衆生に対応するために三業を莊嚴していると考えていたことがわかる。

つづいて曇鸞は、衆生の虚誑の三業対治について具体的に説いている。まず衆生はその身口意において、身見という我執、憍慢というおごり、邪な見解によって謗法や諸種の分別を為し、その結果様々な苦の果報を受けるものであるとしている。その苦の果報の内容は次の通りである。

## 苦の果報の内容

- 身見—三途身（地獄・餓鬼・畜生で受ける身）・卑賤身（貧窮下賤の身）・醜陋身（醜い容姿の身）・八難身（地獄の身・餓鬼の身・畜生の身・長寿天の身・無仏法処の身・邪見により悪を為す身・根欠の身）・流転身（輪廻する身）
- 憍慢—拔舌苦（舌を抜かれる苦）・鞠覲苦（語ることの出来ない苦）・言教不行苦（自分の意見が用いられない苦）・無名聞苦（名声が得られない苦）
- 邪見—分別の苦・取捨の苦を受け、長く輪廻して迷いの生死から出られない

ここに提示される苦の果報は、すべて輪廻と深く関わるものである。つまり、曇鸞が根源的な苦の原因たる三界の輪廻繫縛を離れることを課題としていたことがうかがえる。『往生論註』における三業莊嚴功德釈は、それを速や

かに可能ならしめる、阿弥陀仏の本願他力の具体的作用を説くものといえよう。その内容は、自らの行業によって苦の果報を受ける衆生であつても阿弥陀如来の相好光明身を見、その至徳の名号と説法の音声を聞き、平等の光照に遇つて平等の意業を聞くことができれば、身口意三業の繫縛より解き放たれて浄土に生ずることができるといふのである。そして往生した後は、その果報として平等の身口意業を得ることができると述べている。

以上のように、曇鸞は諸々の仏・菩薩が衆生の虚誑の三業に対応する三業を莊嚴しているものであり、阿弥陀仏も同様に自らの三業を莊嚴しており、衆生がそれを見聞したならば、その果報として浄土に生ぜしめると説くのである。こうした『往生論註』における仏の三業莊嚴功德を見ていくと、呼べば応えるという仏と衆生の呼応関係の原初的な形を見ることが出来る。衆生が三業の悪を止めるといふことに關しては、作願門の解釈において奢摩他を止悪の意に取り、その三義を説明する中にも見られる。しかしそれは「もし人また彼國に生ずれば自然に身口意の悪を止む」というもので、衆生は得生後に極樂浄土という環境的に清浄なところに至ることによつて、身口意三業の悪がただ起こらないとするにとどまっている。すなわち往生以後のことであつて、しかもその三業の繫縛そのものを滅するに至つてはいないのである。したがつて、この三業莊嚴功德積においてのみ現世と往生後の両者に關わる功德として、阿弥陀仏と衆生との直接的対応の關係が示され、更には衆生の三業の繫縛そのものを滅せられるという功德を曇鸞は説くのである。

『往生論註』における「是心作佛是心是佛」釈は、仏智の境界にありながら相好を有する仏を説き示す一段であり、衆生の観見の対象となりうる相好を肯定する内容である。曇鸞はこれを上卷身業功德偈頌解釋に据えた後に下卷三業莊嚴功德積において、衆生と仏の両者が三業によつて直接対応するからこそ衆生は清浄化されると説いている。また、上卷の身業功德積並びに下卷三業莊嚴功德積前半においては、主語が「諸仏」となっており、諸仏の功德として解釈されている。これに対し、三業莊嚴功德の具体的内容を説く一段においては、阿弥陀仏に相好光明身

があつてこそ衆生の虚誑の三業が清浄化されるのであるとして、「阿弥陀仏」の功德を説いているのである。これらのことを勘案するならば、曇鸞が衆生に見聞可能な阿弥陀仏の仏身を説く前提として「是心作佛是心是佛」釈を身業功德のところの設け、仏身が衆生に縁遠いものではないことを示そうとしたことが推察されるのである。

#### 四、道綽・善導への影響

以上見てきたように、曇鸞は阿弥陀仏と衆生心の關係を二元的に捉えており、阿弥陀仏の仏身は仏智の境界にありながら相好を有するものとしている。また、更に曇鸞において阿弥陀仏は相好を含む三業を莊嚴しており、凡夫衆生の虚誑の三業を対治するものと捉えられている。曇鸞は、阿弥陀仏が衆生を濟度しようとする積極的、且つ能動的な働きかけがあるとまでは述べていないものの、阿弥陀仏の勝義性を宣揚し、その極めて具体的な本願他力の功德を説いている点は、曇鸞在世当時において画期的なものであつたことが予想される。ここでは、その様な『往生論註』における解釈が与えたであろう後代への影響を、特に①道綽と②善導を中心に見ていきたい。

##### ①道綽への影響

曇鸞を受けて浄土教を弘通した道綽の『安樂集』には「是心作佛是心是佛」釈は見られないものの、次のような阿弥陀仏の浄土の有相・無相についての議論がある。『安樂集』第二大門第二には、

第一破妄計大乘無相者、問曰、或有人言、大乘無相、勿念彼此。若願眾生淨土、便是取相。轉増漏縛。何用求之。答曰、如此計者、將謂不然。何者、一切諸佛說法、要具二緣。一、依法性、實理。二、須順其二諦。彼計大乘、無念、但依法性、然謗無緣求。即是、不順二諦。如、此見者、墮滅空所收。是、故無上依經云、佛告阿難、一切衆生若起我見、如須彌山、我所不懼。

何以故。此人雖未得<sub>レ</sub>出離。常<sub>レ</sub>不壞<sub>レ</sub>因果。不失<sub>レ</sub>果報。故。若<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>空見。如<sub>レ</sub>芥子。我<sub>レ</sub>即不許。何以故。此見者。破<sub>レ</sub>夷<sub>レ</sub>因果。多<sub>レ</sub>墮<sub>レ</sub>惡道。未來<sub>レ</sub>生處。必背<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>化。今勸<sub>レ</sub>行者。理<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>無生。然<sub>レ</sub>二諦<sub>レ</sub>道理。非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>緣求<sub>レ</sub>一切得<sub>レ</sub>往生也。

とある。これはみだりに大乘の無相に固執する者に対して示された問答であり、大乘の無相は浄土や穢土を論ずることがなく、浄土を願生することは取相であつて煩惱の繫縛が増すのにならして浄土を求めるのかと問いを出してこれに答えている。道綽は質問者のように大乘の無相無念に固執すれば、ただ法性の真理にのみ依り、能縁と所縁と相對して往生を願求することを勝りしりぞけることになるため、二諦の道理に順せず因果を信じない惡取空に陥るだろうと述べている。そして、真諦訳「無上依經」を経証として大乘無相に固執することは仏の教化に背くものであることを示し、逆に有相の浄土への往生を願うことは二諦の道理に順じた行いであることを説いている。また道綽は、

問曰、或<sub>レ</sub>有人言<sub>レ</sub>。所觀<sub>レ</sub>淨境約<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>內心<sub>レ</sub>。淨土融通<sub>レ</sub>。心淨<sub>レ</sub>即是<sub>レ</sub>淨土。心外<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>法。何<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>。答曰、但<sub>レ</sub>法性<sub>レ</sub>淨土<sub>レ</sub>。理處<sub>レ</sub>虛融<sub>レ</sub>。體無<sub>レ</sub>偏局<sub>レ</sub>。此乃<sub>レ</sub>無生<sub>レ</sub>之生<sub>レ</sub>。上土<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>。《中略》自<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>中下<sub>レ</sub>之輩<sub>レ</sub>、未<sub>レ</sub>能破<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>。要<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>信佛<sub>レ</sub>因緣<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>淨土<sub>レ</sub>。雖<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>彼國<sub>レ</sub>。還<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>土<sub>レ</sub>。又云<sub>レ</sub>。若<sub>レ</sub>攝<sub>レ</sub>緣從<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>。即是<sub>レ</sub>心外<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>法。若<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>二諦<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>。淨土無<sub>レ</sub>妨<sub>レ</sub>。是<sub>レ</sub>心外<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>也。

と述べて、浄土が衆生の内心にのみあるとせず、心外有相の浄土を説いている。それは、中下輩の者は信仏の因縁によつて往生を求めるものであり、彼らには有相の浄土に往生するというものである。そして真理によれば心外に浄土はないけれども、俗諦によつて考えれば、浄土が心外にあることを妨げないと説明している。すなわち道綽は有相の浄土を肯定し、しかもその浄土は自らの心外にあるものと理解していることがわかる。道綽が中下輩の者達も信仏の因縁によつて往生出来るとし、その浄土が心外にあつて有相であることは、名前こそ挙げられていないが曇鸞の影響によることはいうまでもないだろう。仏身に關する直接的な見解ではないが、仏の身土は不二であるから、心外、有相の阿彌陀仏というものを道綽も想定していたとみなされる。そしてこの浄土の有相の内容について『安樂集』第七大門には、

第一此彼取相<sub>レ</sub>。料簡<sub>レ</sub>縛脫<sub>レ</sub>者。若取<sub>レ</sub>西方<sub>レ</sub>淨相<sub>レ</sub>。疾<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>解脫<sub>レ</sub>。純<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>極樂<sub>レ</sub>。智眼開朗<sub>レ</sub>。若取<sub>レ</sub>此方<sub>レ</sub>穢相<sub>レ</sub>。唯有<sub>レ</sub>安樂<sub>レ</sub>癡盲<sub>レ</sub>厄縛<sub>レ</sub>憂怖<sub>レ</sub>。問曰、依<sub>レ</sub>大乘<sub>レ</sub>諸經<sub>レ</sub>。皆云<sub>レ</sub>無相<sub>レ</sub>乃是<sub>レ</sub>出離<sub>レ</sub>要道<sub>レ</sub>。執相拘礙<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>塵累<sub>レ</sub>。今勸<sub>レ</sub>衆生<sub>レ</sub>捨穢<sub>レ</sub>忻<sub>レ</sub>淨<sub>レ</sub>。是<sub>レ</sub>義云何<sub>レ</sub>。答曰、此<sub>レ</sub>義不<sub>レ</sub>類<sub>レ</sub>。何<sub>レ</sub>者。凡<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>二種<sub>レ</sub>。一<sub>レ</sub>者於<sub>レ</sub>五塵<sub>レ</sub>欲境<sub>レ</sub>妄愛<sub>レ</sub>貪染<sub>レ</sub>。隨<sub>レ</sub>境<sub>レ</sub>執著<sub>レ</sub>。此<sub>レ</sub>等<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>縛<sub>レ</sub>。二<sub>レ</sub>者愛<sub>レ</sub>佛<sub>レ</sub>功德<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>淨土<sub>レ</sub>。雖<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>。名<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>解脫<sub>レ</sub>。《中略》淨土論云、觀佛國土清淨味、攝受衆生大乘味、類事起行願取佛土味、畢竟住持不虛作味、有<sub>レ</sub>如是等<sub>レ</sub>無量<sub>レ</sub>佛道味。故雖<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>。非<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>執縛<sub>レ</sub>也。又彼<sub>レ</sub>淨土<sub>レ</sub>所言<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>者、即是<sub>レ</sub>無漏<sub>レ</sub>相實<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>也。

とある。ここで道綽は西方浄土の有相と此土の有相を簡別して淨相と穢(縛)相とし、内容の異なることを示している。曇鸞の『往生論註』を証左として、同じ有相といつても穢土の有相は欲境に妄愛・貪染する執着の相であるのに対し、浄土の有相は無漏・実相の相としている。つまり、道綽が『往生論註』に説かれる阿彌陀仏の浄土を無漏実相の浄土によつて建立されていると受け取つていたことがわかるのである。西方浄土は心中にのみあつて無相であり、有相の浄土は執着を増さしめるものであると否定的に取り扱われていた当時にあつて、道綽は『往生論註』に説かれる有相莊嚴の浄土の理論をもつて阿彌陀仏の浄土への往生を勧め、中下輩の者の往生を説いているのである。道綽は『觀經』「是心作佛是心是佛」釈を行わないものの、心外有相の極樂浄土を説明する。そして、結局はそのことによつてその浄土の教主たる阿彌陀仏の心外有相を説き出し、曇鸞同様仏と衆生の關係を二元的關係としていたことが推察されるのである。

## ②善導への影響

道綽の弟子である善導は、主著『觀經疏』において曇鸞と同じく「是心作佛是心是佛」釈を行った上で、仏と衆

生の直接的な関わりを説いている。次に善導の解釈に見られる曇鸞の影響を見ていきたい。まず「法界身」については、

言「法界」者有三義。一、一六者心遍、故「法界」、二、二六者身遍、故「法界」、三、三六者無障礙、故「法界」、正由心到、故「身亦隨到」、身隨於心、故「言是法界身也」。言「法界」者、是「所化」之境、即衆生界也。言「身」者、是「能化」之身、即諸佛身也。

とある。善導はまず「法界」を(1)仏心が遍満している、(2)仏身が遍満している、(3)仏には障礙がないという三義で説明する。そして、「法界」は(1)(3)の性質を具えているのであるから、仏心が「法界」に到れば仏身もその心に随って「法界」に到るとしている。この「法界」に仏が心と身を随えている状況を「法界身」と捉えているのである。更に「法界」と言うはこれ所化の境、即ち衆生界なり。身と言うはこれ能化の身、即ち諸仏の身なり」として、善導は「法界身」という語を「法界」の二字と「法界身」の三字の二種に區別して解釈している。すなわち「法界」は「所化の境(化益される側)」「衆生界」であり、「法界身」は「能化の身(化益する側)」「諸仏身」であるとする。ここで明確に仏と衆生をわけている。善導がこのように仏と衆生の関係を完全に二つに分けて説く点は、曇鸞、道綽と次第する浄土教の流れにおける特徴であるといえるだろう。ただし、「法界身」について衆生を化益する仏身とし、仏と衆生の関係を救済者と被救済者と捉えた点は善導の大きな特徴といえる。次に「是心作佛是心是佛」の解釈については、

三、三六從「是故汝等」下至「從心想生」已來、正「明結」勸利益。此「明標」心想、佛。但作「佛解」從「頂至」足、心「想」不捨、一「觀」之、無「暫」休息。或「想」頂相、或「想」肩間白毫乃至「下千輪」之相。作「此」想、時「佛」像「端嚴」相、好具足、了然、而現。乃由「心緣」一「相」故、即「一」相現。心若不緣、衆相不可見。但自「心」想、即應、心而現、故「言」是心即是三十二相也。言八十隨形好者、佛相既現、衆好皆隨也。此「正明」如來教、諸「想」者、具足、觀也。言「是心作佛者、依自信心緣、相如作也」。言「是心是佛者、心能想、佛依想、佛身而現」。

即是「心佛」也。離「此」心、外更無「異佛」者也。

とある。善導は「是故汝等心想佛時是心即是三十二相八十隨形好是心作佛是心是佛諸佛正徧知海從心想生」の文を、心に仏を想うことを明かすものとしている。具体的には三十二相の仏の相好身を着想することであり、所縁の有相仏身と能縁の心が相對している。それが三十二相八十隨形好という差別相を有する仏を衆生が想った時、その仏が衆生の想いに応じて心に現じるといえるものである。したがって「是心作仏」と言うは、自らの信心に依って相を緣ずること作のごとし。是心は仏と言うは、心によく仏を想えば、想に依って仏身現ず。即ちこの心仏なり」と述べて、「是心作佛」を仏の相好身を着想することとし、「是心是佛」を仏が衆生の想う心に応じて現れることとしている。善導は仏が能動的に自身(仏)を想う者に対してすべての相好を觀じさせると解釈しており、衆生の思想中に自性として仏があるとはしないのである。そして「諸佛正徧知」については、

言「諸佛正徧知」者、此「明」諸佛「得」圓滿無障礙智「作意、不任意」常「能遍知」法界之心、但能作「想」即從「汝」心「想」而現、似如「生」也。

とあり、諸仏が得ている無障礙智のことと解釈している。善導はこれにより、衆生が仏を想うと想わないに関係なく、常に諸仏は「法界の心」「衆生の心」を知っており、衆生が仏を想えば有相の仏が衆生の心によって現じることが、生じるのに似ているのである。仏と衆生を明確に分けて捉える善導はこの後の解釈において、衆生の機根を「九品皆凡」とする立場から、ただ西方を指して有相を立てて心をとどめて衆生に境を取らせるといふ、心外の指方立相の仏と浄土を説くのである。

善導『觀經疏』における「是心作佛是心是佛」の釈義は、まず「法界身」を衆生化益の仏身とし、衆生救済の仏として、その上で、衆生の心が三十二相八十隨形好の仏の相好身(差別相)を想うことによつて自らの心中に仏の相をなし(是心作佛)、衆生の想いに応じて有相の仏が衆生の心に現れている心の状態を仏(是心是佛)とするのである。したがって、善導『觀經疏』における仏と衆生の関係は、救済者と被救済者というはつきりとした而

二相對をなすものと解釈されている。また、善導はこうした「是心作佛是心是佛」釈をした後、第九真身觀において仏と衆生の關係について次のような問答を設けている。

問曰、備修衆行但能迴向、皆得往生。何以佛光普照、唯攝念佛者、有何意也。答曰、此有三義。一、明親縁。衆生起行、口常稱佛、佛即聞之。身常禮敬、佛即見之。心常念佛、佛即知之。衆生憶念、佛者、佛亦憶念、衆生。彼此三業不相捨離。故名親縁也。二、明近縁。衆生願見佛、佛即應念、現在目前。故名近縁也。三、明增上縁。衆生稱念、即除多劫罪。命欲終時、佛與聖衆、自來迎接。諸邪業繫無能礙者。故名增上縁也。自餘衆行、雖名是善、若比念佛者、全非比較也。是故諸經中處處廣讚念佛功能。如無量壽經、四十八願中、唯明專念彌陀、名號得生。又如彌陀經中、一日七日專念彌陀、名號得生。又十方恒沙諸佛證誠不虛也。又此經、定散文中、唯標專念名號得生。此例非一也。

仏の光は普く行きわたっているにもかかわらず、どうして念仏者のみを照らすのであろうかという問いに対し、念仏をする衆生と阿彌陀仏が極めて親しい間柄にあることを示す三縁を説いている。その中、善導は「衆生行を起こして口常に仏を稱すれば、仏即ちこれを聞きたまう。身常に仏を敬礼すれば、仏即ちこれを見たまう。心常に仏を念ずれば、仏即ちこれを知りたまう。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまう。彼此の三業相捨離せず」と述べて、具体的な仏と衆生との関わりを説いている。衆生が信心から自身の身口意において、念仏などの阿彌陀仏に親しい行を修したならば、必ず阿彌陀仏も身口意三業をもつて対応し、決して捨て置くことはないとするのである。つまり、阿彌陀仏にも衆生と対応する三業があり、善導は阿彌陀仏に衆生の三業と相應する三業があるからこそ、念仏者と特別に親しいとするのである。

以上のように、善導は『觀經疏』において「是心作佛是心是佛」釈を行い、その中で仏と衆生の關係を救済者と被救済者というはつきりとした而二相對をなすものと位置づけ、加えて明確に心外の指方立相の仏と淨土を説いている。そして、そうしたことを踏まえて「彼此の三業相捨離せず」と仏と衆生とが三業において相應するものであることを示している。善導のこうした仏と衆生の關係性の理解は、やはり、曇鸞が「是心作佛是心是佛」釈において二元的な仏と衆生の關係を提示し、更に三業莊嚴功德釈において、仏と凡夫衆生の三業は相應するが故に衆生の虚誑を対治出来るとしたことの影響を受けているといえるのではなからうか。もちろん、後代に活躍した善導の解釈する阿彌陀仏觀の方が、曇鸞の解釈する阿彌陀仏觀と比べてより能動的に衆生に働きかける仏身として説かれている点は、善導の淨土教思想に帰せられる特色とするべきであろう。

## 五、おわりに

本論では、『往生論註』における「是心作佛是心是佛」釈自体とその解釈をおこなった意義を考察することを通じて、曇鸞における阿彌陀仏の仏身觀、及び仏と衆生の關係を明らかにした。加えて、曇鸞における阿彌陀仏觀、仏と衆生の關係が、後代の淨土教者である道綽・善導においてどのような形で受容されているかを見てきた。その内容を整理すれば以下の通りである。

『往生論註』における「是心作佛是心是佛」釈の内容

- ・「法界身」は衆生心（法界）において因縁生起する相好の身である。そして、この法界身（三十二相八十隨形好を有する相好身）は、仏を想う衆生の心中に顯現する仏身である。
- ・「是心作佛是心是佛」とは、衆生が心外の仏の相好身を自らの心中に想うことによって、心外の仏を心中に現起させ、その仏が現れている時の心が仏であるということ。仏という火があるからこそ衆生心という木は焼か

れて(浄化されて)仏の火となるのであり、いかえれば、「浄化作用のある仏」が「衆生の心」において顕現している状態が「仏」である。

・「正偏知」は衆生の心現に顕現する諸仏が得ている完全な智慧・悟りである。それは、曇鸞が前述の仏の相好身を仏智の境界に基づくものとし、執着を有する「事相」ではなく、出世間に入った上であらわされる「有相の仏身」としていたことを示すものである。

『往生論註』における『観経』「是心作佛是心是佛」釈は、仏と衆生の関係が二元的であって離れず、尚かつ衆生の心中に現れる仏は相好を有しながらも仏智の境界(法界・法相にかなった智慧)にあることを説き示しており、衆生の観見の対象となりうる相好を肯定している。

『往生論註』における「是心作佛是心是佛」釈の意義

・ 仏の三業莊嚴功德は、凡夫衆生が罪を重ねて三界を出ることができないため、直接的に衆生の虚誑の三業を対治するためのものである。

・ 衆生と仏の両者が三業によって直接対応するからこそ衆生は清浄化される。

・ 上巻の身業功德並びに下巻三業莊嚴功德前半においては、主語が「諸仏」となっており、諸仏の功德として解釈されている。これに対し、三業莊嚴功德の具体的内容を説く一段においては、阿弥陀仏に相好光明身があつてこそ衆生の虚誑の三業が清浄化されるのであるとして、「阿弥陀仏」の功德を説いている。

・ 阿弥陀仏と衆生との直接的対応の関係が示され、しかも衆生の三業の繫縛そのものが滅せられるという功德は三業莊嚴功德においてのみ見られるものであり、これは現世と往生後のどちらにも関わる功德といえる。

『往生論註』における「是心作佛是心是佛」釈の意義とは、衆生に見聞可能な阿弥陀仏の仏身を説く前提として「是心作佛是心是佛」釈を身業功德のところに設け、仏身が衆生に縁遠いものではなく、衆生と直接対応することを示そうとしたことにあると考えられる。

### 道綽・善導への影響

#### ① 道綽

- ・ 中下輩の者達も信仏の因縁によって往生出来るとし、その浄土は心外にあつて有相であるとしている。
- ・ 有相といっても穢土の有相は欲境に妄愛・貪染する執着の相であるのに対し、浄土の有相は無漏・実相の相としている。その上で阿弥陀仏の浄土は無漏実相の浄相によって建立されているとしている。
- ・ 『観経』「是心作佛是心是佛」釈を行わないものの、心外有相の極楽浄土を説明することによって、結果としてその浄土の教主たる阿弥陀仏を心外有相であるとしていることになる。

#### ② 善導

- ・ 「法界身」釈において「法界」を「所化の境(化益される側)」「衆生界」とし、「身」を「能化の身(化益する側)」「諸仏身」であるとする事で明確に仏と衆生をわけて考え、二元的な仏と衆生の関係を説いている。
- ・ 「是心作佛是心是佛」とは、三十二相八十隨形好という差別相を有する仏を衆生が想った時、その仏が衆生の想いに応じて心に現れるというものとし、衆生の心想中に自性としての仏があるとはしていない。
- ・ 「正偏知」は諸仏が得ている無障礙智(仏が得ている完全な智慧・仏智)の(こと)と解釈している。
- ・ 阿弥陀仏にも衆生と対応する三業があり、阿弥陀仏に衆生の三業と相応する三業があるとする。

阿弥陀仏の仏身仏土を、心外にあつて衆生心内の本性として捉えず、尚かつ仏智にかなった上で示される勝義

の有相として捉えていることは、曇鸞にはじまり道綽、善導と次第する浄土教の流れにおける大きな特徴といえる。また善導が『観経』「是心作佛是心是佛」釈によって仏と衆生に二元的な関係を提示した上で、仏と衆生は身口意三業によって直接的に対応するものとし、三業において直接的に対応するが故に衆生は利益を蒙るのであるとしている点は、曇鸞からの影響が考えられる。

『観経』が引用される最古の論書である『往生論註』における『観経』「是心作佛是心是佛」釈は、いかなる仏を求めるべきであるのか、またその仏と自己とはいかなる関係にとらえるべきなのか、という信仰上極めて重要な問題を解決しようと試みたはじめのものである。そして、その中に説き出された阿弥陀仏と衆生の関係は、上述の通り両者が直接向かい合うことが可能であるからこそ具体的な利益を受けることができ、虚妄な凡夫衆生であっても損益を受けることが出来るとするのである。そして、その解釈は隋、唐代の諸学僧達の様々な解釈によって論破されることなく、むしろ後に続いた道綽、善導によって受容・展開されることとなる。善導の『観経疏』に依って開かれた日本の法然浄土教における仏と衆生の関係の源流を、このような『往生論註』の解釈に見いだすことが出来るのではなからうか。

(大正大学総合佛教研究所研究生)

## 註

- (1) 『浄全』一巻二二一頁上。
- (2) 『浄全』五巻一八五頁下。
- (3) 『浄全』五巻三四七頁上。

- (4) 『正藏』八五巻二二八八頁a。
- (5) 恵谷隆戒著『浄土教の新研究』(一九七六年十一月)所収の復元本三七七八頁。
- (6) 『浄全』二巻四七頁上。
- (7) 『浄全』五巻二二二頁下。
- (8) 『浄全』六巻八三頁下。
- (9) 『正藏』三六巻七八二頁b。
- (10) 『正藏』四七巻一三九頁a。
- (11) 『浄全』一巻四三頁。
- (12) 「作」は漢文を読む上で「なす」、「なる」と読むこともあるが、当然こしらえる事を意味する「つくる」とも読む。また、しばしば能動的に物事を行うとする「作意」や「興起」の意味にも用いられる。訳語として考えた場合に「作佛」は「仏となる」と読ませることが通例かも知れないが、曇鸞や善導、懐感においては「是心作佛」の「作佛」を「作想」と理解している。そのような理解の上に立つ浄土宗では、この「是心作佛是心是佛」の「作」を「作想」の意味と解釈し、伝統的に「つくる」と読んでいる。
- (13) 『浄全』一巻一九二頁。
- (14) 『往生論註』(『浄全』一巻二三〇頁下)、『観経』(『浄全』一巻四三頁)。
- (15) 『往生論』には「相好光一尋」とあるが、阿弥陀仏の相好の光が曇鸞在世当時一般的に六尺程度とされていた「一尋」という狭い範囲しか照らさないわけがないとして、昔からの俗説及び『観経』第九真身観の一節を引用して会通している。内容としては、両腕を伸ばした長さ(身長と同じ)を一尋とする俗説にもつき、『観経』に説かれる阿弥陀仏の身高六十万億那由他恒河沙由旬をもって一尋としている。(『浄全』一巻二三〇頁下〜二三二頁上)
- (16) 曇鸞が『観経』「是心作佛是心是佛」を釈した理由について、深励は『註論講苑』巻十(論註講義「五六二頁上」)の中において次のように述べている。それは「鸞師の御時代の人も皆な聖道門の見解を以て佛を觀すると云えば心の實相を觀することとするものが多かりたものなり。夫では淨土門の觀の義ではない故上卷に問答を設けて、『観経』の「是心作佛是心是佛」の經文を引いて、夫れを釋して實相の理觀ではない、西方の阿彌陀佛を觀する事觀ちやと云ふ趣を述べてあり」というものである。つまり、『観経』所説の仏身觀があくまでも阿彌陀仏の相好身を觀するものであることを示すために、曇鸞は『観経』「是心作佛是心是

佛」を釈したとしている。本稿では以上のような深励の指摘を踏まえた上で、さらに曇鸞が『観経』「是心作佛是心是佛」を釈すことよって阿弥陀仏の相好身を観することを示した理由を考察していきたい。

- (17) 懷感「釈浄土群疑論」における『観経』「是心作佛是心是佛」釈については、金子寛哉氏の「懷感の『是心作仏』釈をめぐる」(『印仏』三九二、一九九一年三月)、及び「懷感の念仏三昧説」(『浄土宗学研究』第五号、一九七一年三月)に詳説されている。

- (18) 『往生論註』(『浄全』一卷二二二頁上)

- (19) 柴田泰氏も「中国浄土教と心の問題」『観経』「是心作仏是心是佛」理解(『仏教思想』9心、一九八四年)四一五頁において「法界身」を「相好身」としている。

- (20) 福原隆善氏「仏と衆生」『観経』の「是心」釈をめぐる(『浄土宗学研究』第七号所収、一九七二年)一一二頁参照。

- (21) この法界の内容は、広義には衆生の心も含むものといえるが、ここでの意味としては「法相」「法性」と同義と考えられる。それは、この「正偏知」の説明の文が仏所得の「法」である阿耨多羅三藐三菩提の説明文(『浄全』一卷二五五頁上)中の「聖智」の内容とほぼ同様であることからうかがい知れる。

「正偏知」の説明 — 「如法界而知也、法界無相故諸佛無知也」

「聖智」の説明 — 「如法相而知故稱為正智、法性無相故聖智無知也」

両者はいずれも、本性が無相である法界・法相に依って知る智慧が仏智であるとし、その智慧を無知(有知・無知を越えた絶対的な知)としている。法相・法性の内容を更に詳しく言うならば『往生論註』に「如来者如法相解如法相説」(『浄全』一卷二三八頁上)、または「從菩薩智慧清淨染淨業起莊嚴仏事依法性入清淨相是法不顛倒不虛偽名為真實功德云何不顛倒依法性順二諦故」(『浄全』一卷二二二頁上)とあるように、仏の依りどころとなる法であり、顛倒や虚偽の無い真實功德や清淨相に通入させるものといえるだろう。ちなみに、この法界を良忠「往生論註記」巻第三(『浄全』一卷二九五頁上)と深励「註論講義」巻五(『論註講義』三〇九頁下)は理法界と解釈している。良忠は「正偏知」の体を理法界とする理由を仏が既に真理を悟っている点に置いている。その上で、凡夫には「事相」を離れる智慧はなくとも、仏に「事相」を示す徳があり、行者はこの徳を信じることよって仏を見ろという利益を得るとしている。また、聖聰は「註記見聞」巻第八(『浄全』一卷四二二頁下)において「正偏知」を内証の理としている。

- (22) ここでの「無相無知」は藤堂恭俊氏の指摘(『国歌』諸宗部五、四四頁、註二三〇)の通り、「肇論」般若無知論第三(『正藏』

四五卷一五三頁a)の影響と考えられ、「無知」が非常に高い境地であり、「有知」「無知」を越えた絶対的な知とすることが妥当であろう。

- (23) 藤堂恭俊氏は「無量寿経論註に説示せられる佛身上に關する見解」(『仏教文化研究』二号、一九五二年九月)、曇鸞の浄土に關する見解(初出「仏教文化研究」六、七号、一九五八年三月)、及び「北魏仏教における称名とその社会背景」特に曇鸞浄土教を中心として(『北魏仏教の研究』横超慧日編、平楽寺書店、一九七〇年三月)等において、極楽浄土の「有相」を曇鸞がいかに捉えたかについて詳しく説明されている。ここには要所のみを挙げたい。藤堂氏は「功德莊嚴」という有の相は曇鸞によって「有を出てしかも有なる」と指摘せられるような、空の有として把握せられるべきである。かかる空の有としての功德莊嚴が勝義を知り、獲得せんとするものにとつて境たる「もの」としてあり、曇鸞が浄土や仏身に勝義の有相を想定していたことを指摘している。また菅根宣雄氏は「仏辺と機辺について」(『仏教文化学会紀要』第十二号、二〇〇三年)の中で、『往生論註』における阿弥陀仏の仏身仏土の有相について「仏は法性の理を証得するのであるが、この境界は真實清淨にして無差別であり無相である。執着心を持った凡夫にとつては到底入ることができない境地である。そのために阿弥陀仏は、四十八願を修起し方便として有相莊嚴を示すのである。したがって、そこで示される莊嚴は、仏智の境界より出でたものであるから、差別相を有し、有相であるといつても三界と同一次元で語られるものではない。あくまでも勝義・真實の境界を差別相によって表現したものである。有相である極楽浄土の正報依報は、衆生救済のために阿弥陀仏が示されたものであり、相対的な衆生世界を超えたものであることを再確認しておく必要があるだろう。極楽の有相莊嚴は単なる有相ではなく、阿弥陀仏の無分別智から後得智への展開とされているのである」と言及し、やはり曇鸞が浄土や仏身の相として勝義の有相(無分別後智)を想定していたことを指摘している。

- (24) 『浄全』一卷二四六頁上、下。

- (25) 曇鸞は「応知とはまさにこの三種の莊嚴成就は、もと四十八願等の清淨の願心の莊嚴したまうところなるに因つて、因淨なるが故に果淨なり、無因と他因あるにはあらざり」ということを知るべけんとなり(『浄全』一卷二五〇頁上)と述べて、浄土及び仏身の勝義性を仏の願心に託して説いている。

- (26) この八難身の説明は、藤堂氏の指摘に従い『長阿含経』(『正藏』一五五c)に説かれる八難解法の内容を用いた。『国歌』諸宗五・七六頁の注一三九

- (27) 『往生論註』上巻で清淨莊嚴功德成就を説く中、「この清淨はこれ總相なり。仏もこの莊嚴清淨功德を起こしたまう所以は、三

界を見たまうにこれ虚偽の相、これ輪転の相、これ無窮の相にして、軼躑の循環するが如く、蠶繭の自縛するが如し。哀なるかな、衆生この三界に縮られて顛倒不浄なり。衆生を不虚偽の処、不輪転の処、不無窮の処に置いて畢竟安楽大清浄の処を得せしめんと欲す。この故にこの清浄莊嚴功德を起したまう。成就といふところは、この清浄は破壊すべからず、汗染すべからず、三界のこれ汗染の相、これ破壊の相なるが如きにはあらざるなり。『浄全』一卷二二二頁下」とある。この中で曇鸞は、阿弥陀仏が浄土の莊嚴全体に関わる清浄莊嚴功德を成就された理由として、三界にあるが故に顛倒不浄な衆生を哀れんだことを挙げてゐる。また、繫業のことについては、『往生論註』上巻末の八番問答中に詳説されている。『浄全』一卷二二六頁上〜下、八番問答で触れられている阿弥陀仏の名号はここでは口業莊嚴功德の具体相として取りあげられている。

(28) 良忠や深励等、先学にならい「入諸佛如来家」は『観経』「生諸佛家」『浄全』一卷五一頁」と同様に浄土に生ずることと解釈した。

(29) 衆生が浄土において平等の身口意業を得ることは、「かの浄土に生ずることを得て、阿弥陀仏を見てまつれば、未証浄心の菩薩、畢竟じて平等法身を証することを得」の「平等法身を証することを得」と同様であると藤堂氏は指摘している。『浄土仏教の思想』四巻、一九九五年七月、一八八頁

(30) 藤堂氏前掲書一八八頁には、「この阿弥陀仏の三業に具わる偉大なるはたらきは、得生者の三業に対応してのことであり、阿弥陀仏が為物身として、救済すべき衆生にかかわるのに人格的対応をもって臨むことを註主はあきらかにしたと受けとることができるとあり、『往生論註』における三業莊嚴功德積において、曇鸞が阿弥陀仏と往生人の人格的対応関係を示していることを指摘している。

(31) 『浄全』一卷二二九頁上。

(32) 藤堂氏は、奢摩他による止悪はあくまでも三毒に結使されないことであり、三毒を根絶したわけではないことを指摘している。『藤堂氏前掲書一八五頁』

(33) 千葉良道氏は『往生論註』に、「この十七句は但だ疑を釈するのみにあらず。この十七種莊嚴を觀すればよく真実の淨信を生じて必定してかの安樂仏土に生ずることを得。『浄全』二四五頁下」と述べられていることに基づき、『往生論註』における觀察の理由が①願生についての疑いを氷釈すること②真実の淨信を生じて浄土に生ずることを得ることの二点にあることを指摘している。(『往生浄土論註概説』一九三三年十一月、五六頁) 阿弥陀仏の建立した莊嚴功德を觀察することが往生浄土を目的とするものであり、現世での行業と考えるならば、この三業莊嚴功德の内容もただ得生後の功德に限ることなく、いわゆる現世における

る「正受」の状態も含むとすべきであろう。

(34) 『浄全』一卷六八一頁下。

(35) 『浄全』一卷六八二頁上。ここで道綽は「無上依經」を改変して引用することにより、因果の道理を壊すことのない我見よりも、因果の道理を破してしまふ空見の方が、仏の教化に背くものであることを強調している。この改変された経文は、後の迦才『浄土論』、懷感『釈浄土群疑論』、飛錫『念仏三昧宝王論』、智旭『寶王三昧念佛直指』等に用いられている。

(36) 『浄全』一卷六八二頁下。

(37) 『浄全』一卷七〇三頁下。

(38) 柴田氏前掲論文四二六頁参照。

(39) 『浄全』二卷四七頁上。

(40) 福原隆善氏は、善導が『観経疏』「是心作佛是心是佛」釈において「法界」を「衆生界」としたことは、曇鸞『往生論註』に「法界是衆生心法也」『浄全』一卷二二二頁上」によることを指摘している(福原氏前掲論文一一六頁参照)。

(41) 『浄全』二卷四七頁上〜四七頁下。

(42) 『浄全』二卷四七頁上〜四七頁下。

(43) 『浄全』二卷四七頁上〜四七頁下。

(44) 善導の「九品皆凡」説は『浄全』二卷八頁上〜八頁下に記されている。

(45) 田村芳朗氏『鎌倉新仏教思想の研究』(一九六五年三月) 六五三、六五四頁参照。

(46) 『浄全』二卷四九頁上。